

## 中京大学と台湾一時空を越えた絆

鈴木哲造（中京大学教学部研究支援課係長、  
同大社会科学研究所研究員。文学博士。）

1931年8月21日、第17回全国中等学校優勝野球大会は決勝戦を迎えた。この日の甲子園球場は、さえざえと晴れ広がる青空につつまれ、陽炎が大地を衝いて光り、気温30度を越える真夏日であった。覇権をめくり相対峙したのは、東海代表の中京商業学校と台湾代表の嘉義農林学校であり、両校とも大会初出場であった。早朝からスタンドにつめかけた大観衆は、両ナインが入場するや割れんばかりの拍手と大歓声を送り、球場は熱気と高揚に包まれた。14時5分、球審の「プレーボール」のかけ声とともに、ついに争覇の幕が切って落とされた。試合は、中京商業が三回に2点、四回に2点を入れ、嘉義農林の打線を封じる好投により、4-0で制し、真紅の優勝旗は、中京商業の手に翻った<sup>1</sup>。中京商業は、この初出場初優勝という快挙を皮切りにして、第18回大会と第19回大会でも優勝し、夏の甲子園三連覇という偉業を成し遂げ、「中商」の名を全国に轟かせた<sup>2</sup>。この記録は、いまだに破られていない。一方、嘉義農林は、決勝で敗れたといえ、全国に「天下の嘉農」の名声を博し、その後、夏の甲子園に三回、春の甲子園に一回出場した<sup>3</sup>。

さて、第17回大会の熱闘から85年の歳月を経た2016年8月1日、名古屋市のパロマ瑞穂球場

において国際野球親善試合が催された。対戦したのは、学校法人梅村学園中京大学と国立嘉義大学の硬式野球部である。中京大学と嘉義大学は、それぞれ中京商業学校と嘉義農林学校の流れをくんでいる。それゆえ、この対戦は、1931年の夏の甲子園決勝戦を、時空を越えて「再現」したものといえ、話題性に富み、多くのメディアの関心を集めた<sup>4</sup>。

両校は、2015年12月14日に学術交流協定を締結しており、今次の試合は、本協定に基づく交流活動の一環であった。この学術交流協定締結の大きな契機となったのは、台湾映画「KANO 1931 海の向こうの甲子園」である。映画「KANO」は、1931年の夏の甲子園を舞台にして、嘉義農林の野球部が台湾代表となり、甲子園決勝まで勝ち進む奮闘ぶりを描いたもので、2014年に台湾で封が切られ、大ヒットを記録し、2015年に日本で公開された。こうしたなかで、中京大学と嘉義大学との歴史的な縁に注目が集まり、嘉義市政府の斡旋もあって、学術交流協定の締結と1931年夏の甲子園決勝の再戦が実現したのである<sup>5</sup>。

嘉義大学の硬式野球部一行は、2016年7月31

1 「真紅の大優勝旗、何れになびく？『荒削り』か『円熟』か、争覇の壮観！偉観！中京、嘉義必死の攻防 全国中等学校野球決勝戦」『東京朝日新聞』夕刊、昭和6年8月22日、1頁、及び「本社主催第17回全国中等学校野球大会終る 真紅の大優勝旗 中京の手に翻る 武運拙き嘉義農林 全力を傾けて敗れ去る」『東京朝日新聞』朝刊、昭和6年8月22日、3頁。

2 和木康光『真剣味—梅村学園70年の歩み』学校法人梅村学園、1995年、76頁～112頁。

3 『椰影・金穂・野球情—国立嘉義大学98年度校慶暨嘉義農創校90年記念特刊』国立嘉義大学校友総会、2009年、182頁～227頁。

4 例えば、「85年ぶり海越え友情の再戦『中京商 vs 嘉義農林』31年夏の甲子園決勝」『毎日新聞』2016年8月2日付、「中京大 国際親善試合 台湾・嘉義大学と」(『読売新聞』2016年8月2日付)、「流れくむ台湾・嘉義大と中京大が親善試合『嘉義農対中京商』85年前の甲子園決勝を再現」(『中日スポーツ』2016年8月2日付)等の記事が各紙に掲載された。

5 「台湾から訪問団『嘉義大との交流試合を』中京商業学校が登場する映画「KANO」の嘉義市・「国立嘉義大学との学術交流協定の協議開始 梅村理事長ら台湾を訪問」・「中京大学と国立嘉義大学 硬式野球部同士の国際親善試合 2戦とも中京大が勝利」中京大学ホームページ (<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2015/11/010053.html>・<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2015/09/009877.html>・<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2016/08/010879.html>)。2017年5月10日閲覧。

日に来日し、8月1日と3日にそれぞれパロマ瑞穂球場と豊田市運動公園野球場において試合を行い(2日の試合は雷雨のため中止)、4日に帰国した。初戦は中京大が7-4で制し、第2戦もまた9-2で中京大の勝利となった。85年ぶりの再戦は、中京大の2勝で終わった。だが、勝負は時の運である。試合の勝ち負けよりも、野球を通じて、両校の歴史的な絆を確認し、深められたことと、学生間の交流がはかられたことがなによりも大きな成果であった。第2戦終了後、両チームは、ホームプレート前で記念撮影して、再会を誓い合った。

この両チームの再会の約束は、半年後、台湾の



第2戦終了後、ホームプレートの前で(8月3日)

地で果たされることになった。2017年2月19日より24日まで、中京大学野球部一行が訪台し、嘉義を訪れた。中京大学野球部は、19日に嘉義大学で催されたウェルカムパーティにおいて熱烈的な歓迎を受け、20日から23日にかけて、中一日の交流日(阿里山を訪問)をはさみ、嘉義市立野球場において、嘉義大学野球部と3試合を戦った。対戦成績は2勝1敗であった(20日、中京3-4嘉義、21日、中京4-2嘉義、23日、中京3-2嘉義)。嘉義市内には、「2017年甲子園棒球風華再現」と書かれた旗や案内板がいたるところに置かれており、本国際野球親善試合に対する市民の関心の高さが窺われた。事実上、平日にもかかわらず、23日の最終戦には、約220人の市民らがスタンドに駆けつけ、両チームの熱戦を観戦

し、声援を送っていた。試合が終了すると、グラウンドに殺到し、中京大の選手たちと一緒に写真を撮ったり、選手にサインを頼んだりする姿が見られた<sup>6</sup>。

試合終了後、嘉義大学関係者から発せられた「86年の歳月を経てはじめて勝つことができた」という語りは、両校の歴史的な絆の深さを再認識させるのに余りある<sup>7</sup>。こうした絆を大切にし、実質的な交流を深めていくためにも、今後も定期的に親善試合を催し、野球交流を継続して行っていくことが両校間で合意されている。

中京大学と台湾との交流は、嘉義大学にとどま



街灯に掛けられた国際野球親善試合の案内板

らない。そもそも中京大学と台湾との繋がりは、歴史的に長く、かつ密接なものである。中京大学社会科学研究所が台湾総督府文書(現・国史館台湾文献館所蔵)の調査研究を開始したのは1982年のことである。以来、今日にいたるまで、『台湾総督府文書目録』(第1-30巻、1993-2016年)、『台湾の近代と日本』(2003年)、『台湾植民地史の研究』(2015年)といった多くの研究成果を刊行してきただけで

6 「中京大学と台湾の国立嘉義大学 硬式野球部の国際親善試合を台湾で開催 中京大が2勝1敗」中京大学ホームページ(<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2017/02/011484.html>)。2017年5月10日閲覧。

7 「嘉大睽違86年 首賽小勝中京大」嘉義大学ホームページ([http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/news4.aspx?news\\_sn=2905&pages=0](http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/news4.aspx?news_sn=2905&pages=0))。2017年5月10日閲覧。





試合後、台湾の人たちの写真撮影に応じる中京大の選手たち  
(2月23日)

はなく、学術講演会や台湾研究講座（中京大学オープンキャンパス）を開催し、台湾研究の成果を社会に広く還元してきた。組織面についても、2008年に社会科学研究所のもとに台湾史研究センターを設置し、台湾史に関する高度化研究の推進、研究成果の提供、人材の育成という三本の柱を据えて事業を展開している。本年3月26日には対日理解促進交流プログラムのJENESYS 2016 招聘プログラムにより中京大学を訪れた台湾訪日団に対し、社会科学研究所の進めてきた台湾史研究の成果を紹介する等の対応を行った。

中京大学の研究力を結集し、高度な学際的研究を推し進め、もって大学としての研究機能を高度化することを目的として、2015年4月に発足した先端共同研究機構は、台湾との国際共同研究を研究プロジェクトの一つに位置づけ、国立政治大学台湾史研究所と国立台湾歴史博物館との共同研究を進めている。その成果として、台湾の文化部と外交部の支援を受けながら、昨年10月と本年2月に日本と台湾でそれぞれ国際学術シンポジウムを開催した。

このほか、中京大学は、2016年9月22日、台北市立大学とも学術交流協定を締結しており、学術的な共同研究やスポーツ等文化交流に加え、双方の大学からの留学生募集に向けて、両大学に現地



嘉義大学での両チームの集合写真（2月24日）

事務所を設置することにも基本合意した<sup>8</sup>。實際上、同年12月23日には台北市立大学天母キャンパスに中京大学台北オフィスが開設されている<sup>9</sup>。

このように、中京大学がこれまで進めてきた台湾との交流は、面的なひろがりを持つとともに、確実な実績を伴ったものである。今後は、スポーツ交流等を通じた学生間の交流や学術交流のさらなる強化に取り組んでいくだけでなく、台湾の留学生の招致にも力を入れていく方針である。中京大学が日台間の文化交流や学術交流の拠点となり、日台友好の架け橋となることを願っている。

8 「中京大と台湾・台北市立大学、学術交流協定を締結 台湾の大学との協定は国立嘉義大学に続き2校目」中京大学ホームページ (<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2016/09/011021.html>)。2017年5月10日閲覧。

9 「日台交流の拠点整う 台北市立大学内に、中京大学台北オフィスが開設される」中京大学ホームページ (<http://www.chukyo-u.ac.jp/news/2017/01/011360.html>)。2017年5月10日閲覧。